

## 父母の教え

作田 潤一

父、警は、御船町上田代の中畑に作田次雄、トメ子の二男として生まれた。多くを語らない人で、「謹言実直を絵に描いたような人だった」と往年の父をよく知る人から聞いたことがある。父から大声で叱られたことはなかったが、私が幼い頃に妹をいじめて泣かせでもしたのだろうか、家の大黒柱に父の浴衣の帯で括り付けられた記憶が微かに残っている。

父は、定時制高校を卒業して酒販会社で働いた後、農協に長く務めていた。朝早く仕事に行き、暗くなってから帰宅していた。年末の共済勧誘の時期は夜遅くまで同僚と訪問営業をしていた。週休日も「農機具が故障した」と農家から連絡があれば出かけていくことがしばしばで、休日には僅かばかりの山林の手入れや借地の畑の作業をしていた。帰宅すると仕事の疲れを癒す焼酎を飲み、炬燵で横になっている姿が多かった。苦労したからだろう、私や妹の礼儀作法には厳しかった。父が珍しく早く帰った夕方に、数度だけ家の前でキャッチボールをしたり、裏の川で一緒に魚釣りをしたりしたことが、モノクロの画像で懐かしく思い出される。

私が高校生の頃が、ちょうど農協の広域統合の準備が進められていた頃で、父は負債を抱えた方を訪問しての善後策の面談が連夜続き、無理をして体を壊してしまった。

父は私に自分のことをほとんど語らなかったが、私が第一希望の大学に不合格だった日に、「俺は、高校近くの農家に住み込みで働かせてもらいながら、定時制に四年間通った。辛いことも多く、他人の家の食事は美味しくなかった。しかし、高校で勉強したいと頑張った。目指すものがあるなら、楽をせずに頑張りなさい。」と、一年間の大学浪人へ背中を押してくれたことがあった。

祖父が亡くなった際には、葬儀の手配等をする自分

の横にいつも私を置いた。いざという時にどうすべきかを語らずに教えていたのだと、今、改めて思う。

上田代区長として過疎化が進む地域の振興に努めていた最中の57歳で脳溢血のために左半身不随となり、74歳で亡くなるまで車いすの生活を送った。体の自由が効かない父の介護を行うようになってから、父をより身近に感じるようになった。

何かをしてもらった人には必ず「ありがとうございます」と言う父。僅かな望みを捨てずに懸命に辛いリハビリを続ける父。体が不自由になってから饒舌になり、冗談で周りを和ませる父。亡くなる一年前に臍臓に腫瘍が見つかった時には、「医者が少しでも可能性があると言うのなら手術する」と毅然と言い、衰弱した体で手術を受けさせるべきかを迷う母を逆に勇気づけた父。家族が病気になる誰よりも心配していた父。そんな父が、横たわりながら私の事について語った最後の言葉が、「お前は、子どもの時は、勉強を頑張ったもんね。」だった。傍らで、母が目を赤くして笑っていた。

父の教えをじっくりと咀嚼し、己の生き方の道しるべとしたい。

令和3年9月4日、午前8時過ぎ、母ミツ子が倒れた。救急車で搬送された病院で検査の後、脳溢血で危険な状態との説明を受けた。その後、幸いにも緊急手術ができ、一命を取り留めることはできた。

母は、北川健蔵とワサの五女として東上野上に生まれ、七滝中を卒業後に御船高校に進学した。中学校の同級生は130人程いたが進学した女子は僅か4人の時代だったと、母から聞いたことがある。

母は、私や妹の養育をしながら自宅でできる仕事として、自宅で雑貨販売や飲食提供を行うことを選んだ。自宅の一部を改造した小さな店で母の生業は始まった。当初は一升瓶や塩鯖が入っていた木箱を裏返して商品を置く粗末なものだったが、調理師免許や塩・たばこの販売認可などを少しずつ取得し、営業用の中古

冷蔵庫や再利用の商品棚が店内に置かれるようになり、商店らしくなっていったのを覚えている。母は、夜が明けきらぬうちから深夜遅くまで働いた。

私が小学校中学年の頃だっただろう。全校集会で整列して立つ私の後方で、私のことを笑う女子の声が聞こえた。私が履いているズボンの継ぎ接ぎを見て笑っていたのだ。周りには継ぎ接ぎをしている服を着ている子はおらず、私は恥ずかしさに顔が真っ赤になった。その日、私は学校から家に帰るなり、なぜ自分だけ継ぎ接ぎをした服を着せるのかと、母を詰問した。黙って聞いていた母は、やがて静かに話し出した。

「潤一が生まれた時に、『この子を大学までやろう』と父と約束した。あなたを大学にやれるように、儉約してお金を貯めている。父も母も当て布をして繕って着れるうちは、新しい服は買わない。潤一の友だちは、家の仕事を継ごうと思えば出来る。しかし、うちには何も無い。だから、勉強を頑張って、きちんと収入のある仕事に就きなさい。うちの財産は、潤一と千鶴（妹）だけ。あなたたちに何も遺せないから、勉強だけはできるように、父と母は必死に働いている。父は、潤一に学校の先生になって欲しいと思っている。」

両親の期待や思いを知り、情けないことを言った自分を恥ずかしく思った。

そして私は、母に叱咤激励されて大学に進み、学校の教員になった。

最近、仕事の忙しさを言い訳に、老いて手が掛かるようになった母とゆっくり話をすることをしなかった。コロナ禍で、好きな温泉にも連れて行けなかった。

母の部屋を整理していて、倒れるひと月前に家族で見に行った花火のメモがあった。「ドライブイン花火とてもきれい」と書かれていた。

文字を見つめながら、定年退職したら・・・、コロナが収まったら・・・と、母との時間が先送りにしたことを後悔せずにはいられなかった。咲き誇る彼岸花を見て、汀女の句が浮かんだ。「曼殊沙華 抱くほどとれど・・・」今の私があるのは、全て父母のおかげである。